

大阪市の築五十五年の市営住宅に住んでいる。五階建ての建物が十棟並び、そのうちの一枚の五階に入っている。

エレベーターはないし、建物の老朽化が進んでいて、入居者も老人が多い。若い人はほとんどいないので、子供の姿もあまり見かけない。建物と人が老いて、静かに終末が来るのを待っている団地である。

実際に入居者の死もある。それにともなう補充もない。

「この団地は新規の募集を考えていません」

市の担当者の言葉である。

最近、南海トラフ巨大地震や上町断層地震などの大規模地震の発生が危惧されている。

どうとうと言うか、やっとうと言うか、団地の建替事業が始められることになった。

工事は二期にわけて、五年計画で実施される。十棟のうち三棟が一期工事、残りの七棟が二期工事である。私の住んでいる棟は二期工事になる。

建替工事の第一段階は、現在居住している部屋からの引越作業である。引越先の選定も当然、必要となる。引越が全て完了してから解体が始まる。それから整地、地盤調査などが実施され、新しい建物本体の工事である。

市による説明会があった。

新しい引越先として、二カ所が提示された。近隣の新築された団地か、既存の団地である。各人の希望調査を実施して、決定されることになった。重複したら抽選になる。

今回の一期工事に該当している知人が浮かぬ顔をしている。

「引越先の部屋は決まったが、困っている」

「何か問題が」

「隣に困ったちゃんが入居することになっている」

市営住宅では団地内での迷惑行為は禁止されている。

他の入居者に対する恫喝、脅迫、暴力行為は行わない。大きな騒音を出さない。

その他に犬や猫などの動物の飼育はしない。廊下、エレベーターホール前に物を置かない。喫煙のマナーを守る。等々である。

しかし、なかには問題を起こす人がいる。いわゆる困ったちゃんで問題児である。

知人の隣の部屋に、そういう人が入居するようだ。団地内ではクチコミによって、要注意人物はすぐにわかる。他人と協調できずに鼻つまみ者になる。

特に高齢化すると、本人が意識しなくても頑迷になって、攻撃性が出るケースもある。認知障害を患って自分の部屋がわからなくなって、彷徨う人もいる。他人に嫌われることが多い。

私もそうなる恐れがなきにしもあらずである。

「市の担当者に部屋を替えてくれと言ったが」

「それで、どうだった」

「ダメだと言われた」

浮かぬ顔である。

決められた退去期間内に、全員の引越を完了してほしいとのことであった。不満を持つ人も当然出てくるだろう。

様々な思いのなかで、新しい部屋の鍵が渡された。

入居可能な初日から、早くも引越が始まった。団地の三棟分なので、ちょっとした民族大移動もどきである。

業者の大型車が入ってくる。個人の車も荷物を積んで出入りする。その車の間をリュックをいっばいにふくらませた人が歩いている。たぶん貴重品だろうか。早朝から夕刻まで喧噪が続いた。

集団移動を見ながら思った。建替と言っても、この地に新しくできる建物に帰ってくる人はどれだけいるのだろうか。再び帰らない人が大部分ではないだろうか。

引越先が終の住処になる可能性が大である。老人が大部分においては、たぶん私もそうなる。

私の移動は今年かもしれない、あるいは来年、五年先になるかもしれない。否応なく終の住処に行くことになるだろう。

そろそろ身辺整理をする必要がある。建替工事だけでなく、何時大きな病気になるかもしれない。若いときと違って命取りになることもある。自分の意思だけで左右できない。体が動くうちに準備をしておくべきだろう。

三棟分の大移動がほぼ一段落した夜、五階の私の部屋の窓から外を眺めた。暗い。

廃墟という言葉が頭に浮かぶ。一期工事対象の眼前の建物は黒い大きな塊となっていた。五十年にわたって、この場所で幾多の人々の喜びや悲しみを見てきた建物が終幕の時を迎えつつある。

あつけないと言え、その通りである。

まだ人がいるだろう部屋の窓だけが、生命の残り火のごとく、わずかに仄明るい。これも、あと数日でなくなるだろう。